

## 大分県立先哲資料館 編

## 『田原 淳』『田原 淳【普及版】』『田原 淳 資料集』

## はじめに

大分県教育委員会では、郷土の代表的な先哲の業績及び人物像を明らかにすることを目的として『大分県先哲叢書』の刊行を行っている。この度、『田原淳』、『田原淳（普及版）』、『田原淳資料集』が刊行されたので、これら三冊の本を中心に所見を述べてみたい。この三冊の本の中心になる書が『田原淳』である。この本の監修者は東京女子医科大学名誉教授須磨幸蔵先生であり、著者は大分大学名誉教授島田達生先生である。以後須磨、島田と述べる。基本となる本としては、『田原淳』であり、この本を中心に必要により詳しい資料は『資料集』に書かれている。また、青少年には普及版の『田原淳』が島田達生文・佐藤寛子絵で漢字には仮名をふり、随所に挿絵をカラーで入れ田原の人生と業績が分りやすく書かれている。これら三つの本を総称してこれから述べてみたい。

## 第一部 田原淳の概略

田原淳（1873～1952）大分県東国東郡西安岐村（現・国東市安岐町大字瀬戸田）で父中嶋定雄、母サイの長男として出生。中嶋家は代々庄屋を営む旧家であり、祖父定基（9代）の時代に明治維新があり、父定雄（10代）は村正、戸長、村長を務めた。生家は保存されており、百姓一揆の傷跡が床柱に残っている。この田原淳の生家中嶋家には田原誕生碑が田原誕生百年記念として九州大学病理学教室により設置されている。淳の実母サイは後に義母となる田原春塘の妻貞の妹であった。淳は西安岐村の尋常小学校下等科を卒業し、杵築の尋常小学校上等科に進学した。1892年、母の姉貞の嫁ぎ先である中津の田原春塘の養子となったことから田原姓を名乗ることとなった。養父春塘の住所は下毛郡中津町古魚町1655であった。田原家は初代大友能直の第12子、康広が豊後に下向、西国東郡田原庄（現・太田村）に城を持って田原と称した。田原一族は国東を中心に多く見られるよ

うになった。春塘は立石領木下家に仕える医師であった。宇佐神宮宮司安東正之の日記にも度々春塘の診察を受けた記録がある。その後、経緯は判らないが1886年には中津の古魚町で開業していることが判明している。当時の中津藩は奥平氏3代目昌鹿公の時代から蘭学に力を入れ、前野良沢が1770年に長崎に留学しターヘルアナムトミアを持ち帰り、杉田玄白等と共に1771年から3年半の歳月をかけて前野良沢が翻訳の大半の仕事を成し遂げた事でも知られている。良沢は日本における「蘭学の鼻祖」とされている。解剖学や蘭学に関しては非常に多くのパイオニアを生んだ藩である。明治19年（1886）には、小屋川村の山本左平の妻登久が献体を申し出て、地元医師の熊谷静雄らが解剖をした。更に明治22年（1889）、中津で最初の病院を設立した右田力太郎が火薬業富永章一郎の献体解剖を下毛医師会立会で行われた。この時、右田力太郎執刀の一番助手が田原春塘であった。この記録は村上医家史料館の記録に残されている。この様な解剖学の歴史の背景と淳の養父となる田原春塘は解剖学に興味を持っていると言う中で淳は田原家の養子に迎えられたということが田原淳の人生に大きな影響を与えるきっかけとなったのであろう。

## 第二部 田原淳 東京での修学

淳は1892年、田原春塘の養子となり同時に春塘の支援を受け第1高等学校に入学、1897年東京帝国大学医家大学（現・東京大学医学部）に入学、1901年同大学を卒業し1902年1月、同大学皮膚科に副手として入局、同年5月内科に転局し、当初は養父春塘の後継者として臨床医学を修めていた。しかし、田原の頭の中には東大で教えを受けたドイツ人の内科医・ベルツ（1849～1913）、外科医・スクリバ（1848～1905）の講義を聴きドイツ医学の進んだ現状を目の当たりにし、どうしても、このまま開業医と成ることは出来ない思いが

あり、養父春塘に胸の内を正直に申し述べたところ、当初、養父は困惑し、しばらく考え込む日が続いた。しかし、淳の開業の合間に懸命に医学書と向き合う姿を見て、養父春塘は自分自身も解剖学を学んでいることから、この子にはドイツ留学させようという気持ちに変わり、遂に留学を承知することとなる。しかし、私費留学には莫大な費用を伴う事から、田畑を処分して捻出する事を決意した。この事は筆者の知人である植田敏男氏が、田原家の田畑の小作料の徴収、管理、売却等を依頼されていた一連の資料を私に託され、その資料は現在、大江医家史料館に展示してある。ともあれ私費留学の費用は膨大な額となったと思われる。

### 第三部 ドイツ留学

1903年、田原淳は念願のドイツに向け横浜港を備後丸で出航した。備後丸の同船者に後の九州大学病理学第一講座教授となる中山平次郎、又画家で後に高名となる横山大観、菱田春草等も乗船していた。40日間の船旅でドイツに到着し、ベルリンのシャリテ大学に行くも臨床が主体である事が判り、「基礎的研究の分野で医学の進歩に足跡を残したい」という大望があった田原は、陸軍軍医で私費留学していた小久保恵作と遭遇したことで新たな道が開けた。小久保を指導しゲッテンゲン大学でドクトルの学位をとらせたのが、後のマールブル大学のアショフ教授(1866~1942)であった。田原はマールブル大学でアショフに学びたい旨の手紙を書いたところ、幸運にも受け入れられた。アショフから与えられた最初の研究は、クレール教授の新設(ジフテリアや腸チフス等が起きると心臓肥大と心臓衰弱の直接の原因は心筋細胞と心筋細胞間の結合組織の炎症が原因であるという間質性心筋炎説)の解明であった。アルコールやホルマリン漬けされた心臓を、小さく切ってパラフィンで固め、それを厚さ2~15マイクロメートルの切片数千、数万枚に切り分ける極めて根気のいる作業の繰り返し作業から間質性心筋炎説は間違いであるということを見つけた。アショフ教授は次にヒス束(房室連結束)の研究を

提案した。田原は又心臓の組織標本造りに没頭することとなった。プレパラートを研究するなかからヒス束とその上部にある房室結束(田原結節)を発見した。更にアショフは田原にプルキンエ線維の研究をすすめた。田原は従来の諸説を調べなおし、その全てが誤っていた事を突き止めた。房室結束(田原結束)・ヒス束・プルキンエ線維が「刺激伝導系」であることを発見し、心臓の病気は、この伝導系の流れの乱れによって起こるのではないかという学説を発見した。更にこの研究を深めるためにアショフ教授から羊が提供され、羊の心臓でも同様なことを発見し、これは哺乳動物に共通することから『哺乳動物心臓の刺激伝導系』というドイツ語の本を単独で出版した。この事から神経が毎回指令を出し心臓を動かしているという「神経原説」は間違いであり、神経とは関係なく筋肉が心臓を動かしているという「筋原説」が正しいということが発表された。この「刺激伝導系」の発見は、その後、ペースメーカーの発見に繋がらず不整脈や狭心症、心筋梗塞等研究の大本になっており、田原は東京女子医科大学須磨幸蔵名誉教授により「ペースメーカーの父」と呼ばれるようになり、その本も出版された。現在であればノーベル賞に値する発見であるということが分かってきた。この田原の驚くべき研究は心臓の断面図を精細なスケッチによって明らかにしていることである。これを光学顕微鏡で何万枚もの切片を作りながら確認してスケッチしていったことが、この偉大なる発見に繋がった。今日であれば写真撮影される図面が田原直筆で極めて詳細に描かれている。左目で見ても右手でスケッチをしながら極めて詳細な図面を作っていたという事が研究の大本になったのであろうと島田は語っている。田原の刺激伝導系は、その後1907年イギリスのキースとフラックによってキース・フラック結節(洞房結節系)と田原の房室結節系、房室束はヒス束、伝導系終末展開板はプルキンエ線維と呼ばれている。しかしながら、近年田原の名前だけが消え、外国人の名前だけが残っているのは残念である。さて、驚くべきことは、島田は今日の電子顕微鏡を駆使して走査電子顕微鏡を三次元的に

捉え、更に、伝導系各領域の微細構造を透過電子顕微鏡を駆使して、田原のスケッチを全て追い確認した結果、田原の房室結節、ヒス束、プルキンエ線維図が今日の電子顕微鏡像と基本的に一致するものであり、田原は光学顕微鏡で観察しながら、すでに電子顕微鏡レベルの像を思い浮かべていた事になると島田は述べている。更にプルキンエ線維、心室筋移行部も全て電子顕微鏡で確認されたと島田は述べている。この事は、羊に於いても同様に島田によって電子顕微鏡で検証が行われた事が今日のペースメーカーの父と言われ偉大な研究に発展した証である。田原は多くの手紙を残しており、本来2年の留学期限を更に一年半も延長してもらった養父春塘に宛てた感謝の手紙が残されている。またアショフにも父への感謝を度々伝えてきた事がアショフが父に送った手紙からも発見されている。その事は田原の論文発表に伴い、アショフが父に「この本には日本人学生の非常に勤勉さを見ることが出来ます。この本は、父上が私に今まで与えて下さった薫陶に対するささやかな……」とアショフは父親への手紙に記載しており、如何に田原の業績と人物を評価していたかが読みとれる。この手紙は1993年、島田宗洋氏のもとに送られたものを、翻訳され紹介されている。

#### 第四部 田原淳 留学から帰国

1906年、ドイツのマールブル大学の留学から帰国した田原は1年間開業したものの1908年には、京都帝国大学福岡医科大学（後の九州大学）病理学助教授、教授となり医学博士を授与された。1914年には、刺激伝導系発見の功績により帝国学術院恩賜賞を授与され、1920年には第10回日本病理学会総会会長を務めた。1924年には日本病理学会の招きにより、恩師アショフが来日した。伊勢神宮参拝など日本各地を訪ね、記念講演は16回に及んだ。田原は自宅に招き接待した。天皇陛下から七宝花瓶が贈られた。門司港からの帰国見送りは長与又郎（長与専斎の3男でドイツでアショフに病理学を学ぶ）と田原が見送った。田原は1930年、医学部長に、1931年別府に新設された九州帝

国大学温泉治療研究所、初代所長を務め、1933年退職し名誉教授となった。在職中の田原の病理実習室では一人一人に高価な顕微鏡とともに診断名、症例が書かれた百枚の標本が渡されていた。田原は学生達との触れ合いを楽しんでいた。そして弟子達には気儘とも見えるまで研究の自由を認め、弟子達の人気も抜群であった。1922年には満州医科大学が設立され、その後吉林医学校、ハルピン医学専門学校等、海外でも病理学教室の指導にもあたった。

#### 第五部 田原淳と家族、そして学生達

田原は妻暢との間に、1男3女を儲け、長男俊也と貞、静子、幸子がいた。家庭ではやさしい厳父であった。朝8時に出かけ、夕方18時の帰宅する規則正しい生活が日記からも読みとれる。引退後は大分県出身学生のためにニ豊学寮という学生寮を1934年に作り、無償提供し自治療で毎月1回は学生達と夕食を共にして歓談していた。人間味溢れる田原は単に病理学者と言うより学生や弟子達と非常にコミュニケーションを大事にする厳しいながらも温かい教授であり指導者であったことが分かる。

#### 第六部 相次ぐ不幸とその後の田原淳

長男俊也は1914年出生し、1937年九州大学医学部を卒業、第1内科入局後1940年、軍医を志願し海軍軍医中尉となり1943年4月、潜水艦の魚雷攻撃を受け31歳の若さで逝去している。その時に母暢は「伏し拝む 深山もうるむ 暮春かな」という句を読み中津に疎開していたが1945年には、この暢も尿毒症で逝去することとなった。

1946年には、医師村山原之に嫁いでいた長女貞一家が満州から引き揚げ中津で同居していた。田原は野菜作りに精を出し、ピンセットで種まきをしていたのは有名な話である。中津市北門の現松本水産社長宅に屋敷を構え、娘婿の村山原之は現在のNTT付近で開業していた。1947年には、淳は中津医事集団会において講演し、2時間20分間にわたって「心臓刺激伝導系」の演題で記念講演した。その後1951年、村山原之が福岡の薬研町で開

業したため田原も一家と共に移転し、1952年1月19日78歳で逝去した。遺体は九大病理学教室で小野興作教授執刀で解剖され、死因は老衰であった。1月21日承天寺にて葬儀が営まれ、弔辞は留学の往復の船旅で一緒し、九州大学でも一緒に教鞭を執った元九大第1病理学教授の中山平次郎であった。墓所は中津市自性寺にある。自性寺には、田原家長女・村山貞の念願であった彫刻家・常木新二郎氏による記念碑が設置され、裏面には須磨幸蔵氏による業績顕彰文と田原の論文原書を象った焼き物が組み込まれている。台座には羊の顔がある。(1994年7月2日建立)

### 第七部 NPO 田原の会

この田原淳について、島田達夫を中心とした「NPO 田原の会」が設立され、2007年7月28、29日には中津市立小幡記念図書館で島田達夫大分大学教授を組織委員長として、第5回田原シンポジウム中津が開催された。当時、筆者は中津市医師会会長でシンポジウムの名誉会長として参加し、田原淳並びに義父・春塘の業績について発表する機会を得た事は感慨深いことである。この時にはドイツのHeart and Diabetes CenterのAnja Dorszewski 医師が心房細動治療の最前線の特別講演を行い、マールブル大学からも解剖学講座のJuergen Seitz 教授がマールブル大学における田原淳の業績について特別講演を行った。田原がドイツに於いても今なお高い評価を得ていること、その業績の歴史的背景と科学的インパクトについて詳細な報告が行われた。更に淳の孫にあたる村山暁

医師の「じいちゃんの思い出」など淳の人間味溢れる日常生活から解剖学史における位置づけなど発表演題は多岐にわたり聴衆を魅了したことが記憶に残っている。その後、中津市から提供されたバスで、各地から参加された研究者達を私が案内することとなり大江医家史料館、村上医家史料館、自性寺田原墓地、福澤記念館、中津城などを案内した。夜は松永光史松永循環器病院理事長の英語の司会のもとに、清水正嗣大分大学名誉教授・川島整形外科病院名誉院長がドイツ語で乾杯の歌を唄いドイツ語で挨拶がはじまり、和やかな懇親の座が広がった事を記憶している。翌29日には中津市役所ロビーに「田原淳ブロンズ像」が多くのシンポジウム関係者の善意により贈られ除幕式が行われた。

さて、この3冊の田原淳の書が出版されるという事は、同郷の筆者としても誇り高い思いで一杯である。研究者はもとより青少年を含む多くの人に読んで貰いたいと思っている。

### 参考文献

- 『田原 淳』須磨幸蔵 監修・著 島田達夫 著 大分県教育委員会 2020年  
 『田原 淳【普及版】』島田達夫 文 佐藤寛子 絵 大分県教育委員会 2022年  
 『マンガ ベースメーカーの父・田原 淳』原作・須磨幸蔵 マンガ・木村竜成 田村明美 2007年  
 (川島 真人)

[大分県立先哲資料館、〒870-0008 大分県大分市王子西町14番1号、TEL. 097(546)9380、2021年5月]

## 岡田靖雄 著

### 『相馬事件——明治の世をゆるがした精神病問題 その実相と影響——』

本書は岡田氏の「足掛け六〇年の勉強のまとめ」である。氏が「精神科医の立ち場から相馬事件を正確にまとめた最初のもの」として、1964年に発表した論文「相馬事件」(精神医療史研究会編『精神衛生法をめぐる諸問題』所収)を読み返すと、事件の基本的な要素はすでに押さえられてい

る。つまり、本書の骨格は60年ほどまえには用意されており、そこに肉付けする作業が営々と続けられてきたのである。

相馬事件とは何か、精神病問題に与えた影響は何か、というのが本書の問いである。ただし、本書の構成は、「事件の一方の主人公錦織剛清の言